

セクシュアリティ・主体化・ポルノグラフィー

赤川 学

ミシェル・フーコーは「セクシュアリティの装置」という概念を使って、近代社会におけるセクシュアリティの歴史を描きだした。本稿はポルノという現象を、このセクシュアリティの装置という概念枠組みによって、社会学な分析を試みたものである。まず最初にフェミニズムのポルノ批判の視点を批判的に継承しつつ、フーコー主義フェミニズムの問題構制を明らかにした。次にポルノグラフィーの表象とそれが受容されるコンテクストを分析することを通して、私たちは、ポルノグラフィーが諸個人を男性として主体化する装置であることを発見した。

1. 問題の所在

「いま、ポルノグラフィー（以下、ポルノ）が問題である」と書き出してみよう。ではポルノのなにが「問題」なのか。本格的考察を展開するまえにこの問題性を三つの視点から抽出しておきたい。

第一に、私たちをとりまく「いま・ここ」において、性的な興奮を刺激することを意図して作られ、実際にそうしたものとして消費されている表現が、様々なメディアを媒介としたディスコースとして大量に存在している事実がある。これらをさしあたり「ポルノ」と呼ぶことにすれば、この文化現象ともいべきポルノの存在をどう社会の中に位置づけ記述説明するかという社会学上の問題設定がある（問題1）。先行業績として、以下の三つを挙げておこう。①ポルノというディスコースの古今東西を考古学的に発掘してきて、それを歴史と社会変容のなかに位置づける作業（ポルノの歴史学、Hyde[1964=1984]）。②ポルノが消費社会にお

いて商品として果たす機能を論じるもの（ポルノの商品論、Baudrillard[1977=1984]や金塚[1987]）。③ポルノの中に書き込まれたジェンダーの非対称性に注目して、男性優位社会を支えるイデオロギーとしてポルノを捉える理論（ポルノの家父長制イデオロギー論、MacKinnon[1987]、Dworkin[1981]、Barry [197=1984]、Kappeler [1986]）。

第二に、ある種の性表現を社会的に問題のあるものとして議論の俎上に挙げる「社会問題としてのポルノ」という視点がある（問題2）。ポルノを定義し、その難点を評定・批判し、それに対する社会的処遇（検閲や規制）を求める人々の集合行動があり、またそうした行動に反発する人々の集合行動がある。歴史的にみればこの問題2ははつねに「猥褻取締・対・表現の自由」の対立の構図を取ってきたが、80年代以降ポルノをセクシズム・性暴力・セクハラとして捉える視点がフェミニズムから提出され、ディスコース対立の構図は新たな展開をみせている。

第三に、問題2の系として、ポルノがその受け手にどのような影響を与えるのかを科学的に評定する問題設定がある(問題3)。ここでは性表現や暴力表現が短期/中期/長期的に受け手にどのような良い/悪い効果を与えるかが、統計学的データや心理学的実験の結果、提示される。この問題設定は通常、ポルノが性に対する誤った態度や性差別を助長するとかレイプを誘発するといった「イデオロギー効果」を重視する立場と、逆に性に対する寛容な態度を導くとか性的興奮や攻撃的衝動を一時的に解消させるとする「カタルシス効果」を重視する立場に分かれる(多くの場合、ポルノを社会的にどう処遇すべきかの正当性を調達するものとして参照されるが)。この問題設定をメディア論の文脈に置換すれば、受け手の属性(性、階級、個性)やそれをうけとるコンテクストにともなって受け手の反応が変化するというメディア論の視点から分析することもできる(メディアの受け手論)。

私の社会学者としての関心は以上の問題設定のすべてに向けられている(その一試論が赤川[1991]である)が、本稿は第一の問題つまり社会学的対象としてのポルノ問題のために、ある一つの理論的立場——さしあたりフーコー主義フェミニズムと呼んでおく——から参与することを目指したものである。本稿では、社会学的対象としてポルノを取り上げてきた諸理論とりわけフェミニズムのポルノ批判をめぐって、何が問題とされ何が解かれるべき問いとして残存したのかを概観し(2節)、フーコー主義フェミニズムの問題構制を提示しつつ(3節)、ポルノが男性を性の主体として産出する様態を分析する(4～5節)。

2. フェミニズムの問題提起の再構成

1節でみた三つの問題について最も総括的な理論提示をしてみせたのは、間違いなくフェミニズムである。「ポルノは理論、レイプは実践」ということで、問題1についてはポルノが性支配の現実——「男はみる主体、女はみられる客体」という構造や男のセクシュアリティの本質的レイプ性⁽¹⁾——から産まれた幻想であるにも関わらず当の現実そのものを再生産していくという〈現実〉性を指摘し、問題2については女性差別としてのポルノという視点から、国家からの諸個人の自律とともに男性支配からの女性の自律を新たな問題とした。更に問題3についてはジェンダー(性的差異)・セクシュアリティ(性、性的欲望)⁽²⁾が社会的に構成されるという立場から、ポルノがとりわけ男性を性差別的主体に構成すると主張している⁽³⁾。

これに対してフェミニズムのポルノ批判に反発する勇氣ある(?)言説が男性の側から登場する。この中でしばしば強調される論点は「男性はポルノを必要とするのだ」という主張である。この主張はしばしば男性が高度商品化社会・管理社会のなかで疎外されているという観察や、男性が性器的・身体的特性上の理由から「自然と」ポルノを必要とするのだという主張として現れる⁽⁴⁾。

男の性を「自然なもの」(＝生得的・本質的・変更不能なもの)として提示する論点は、性差と性の自然的・生物的決定論に抗して社会的・文化的決定を論じてきたフェミニズムの立場からは認めがたいものであったろう。しかしこれを批判しなければならないフェミニズムがしばしば「男のセクシュアリティは本質的にレイプである」としたり、逆にポルノ的なイデオロギーに汚染されていない「女性本来のセクシ

ュアリティ」を過度に想定するような没歴史的な本質主義に陥っていた点も認めざるをえない⁶⁾。この結果フェミニズムは「男はなぜポルノをみるのか」という問いに殆ど答えることができず、答えたとしても「男はポルノをみたいのが本質だからみるのだ」という同語反復に留まるしかなかった。ここに反フェミニズムの言説が付け込む余地があった。

しかしながらこの両者の対立が見落としていたのは、「ジェンダー・セクシュアリティは生得的か獲得的か」という認識の対立そのものがある実定性⁶⁾の上に成立しているということだ。「ジェンダー・セクシュアリティの構成」といった現象は普遍的で客観的な実在というより、科学的あるいは日常的な知として、そうした過程があると想定しそれについて語る人々の実践活動の中で普遍的・客観的なものとして共同構築されるものである。つまりこの論争をかたどる共通の土俵＝台座そのものが歴史的な言説編製の産物なのである。この観点からすれば、先の問いそのものが擬似問題であり、むしろジェンダー・セクシュアリティはつねに既に歴史的・社会的な変形作用を被った言説としてしか存在しえない。問うべきなのは「ジェンダー・セクシュアリティは生得的か獲得的か」と問うことはどのような意味をもつのか、あるいはどのような歴史的系譜性のもとに可能になったのかということである（問題意識1）。

ディスコースという観点からみると、ポルノもまた「テキストに媒介されたディスコース text mediated discourse」（Smith[1989]）である。そしてその限りにおいて、ディスコースがある仕方で編成されることに伴う規範的効果（これを権力作用という）を発揮する。こうした観点からフェミニズムが提起した「ポルノは男性を性差別的主体として構成する」という問いを私

たちは継承する必要がある。ただし「性差別的である／ない」という分節線を強調する必要はさしあたり、ない⁷⁾。むしろ「ポルノは男性を性的主体として構成する」という事態の意味を、より歴史的な視座から、つまりポルノの表象の歴史的变化とかポルノを可能にした空間の編成に則しつつ、更にいえば近代におけるジェンダー・セクシュアリティ現象というコンテクストに置きなおしつつ考察する必要がある（問題意識2）。こうしてはじめて、ポルノというものが私たちの生きる社会——近代社会——にとって持つ意味をよりよく理解することができる⁸⁾。

3. フーコー主義フェミニズムの問題構制

前節における二つの問題意識は、実はミシェル・フーコーの業績を社会理論として評価したときに浮かびあがる「言説分析」、「権力分析」の方法をポルノという対象に適応した場合に採られるものだ。本来はこの二つの方法とその社会学的適用についての厳密なフーコー読解が必要なわけでも、そうした課題は別の機会に譲ることとして、ここではフーコーの理論と方法を近代社会におけるジェンダー・セクシュアリティ現象を解説するための試みとして、フェミニズム社会理論に引きつけて考えたい⁹⁾。

第一に、フーコーによれば権力とは「無数の力関係」であり、歴史は絶えざる戦略と闘争が生起するゲームの場と考えられている。つまり彼は権力を「一つの制度でもなく、一つの構造でもない、ある種の人々が持っているある種の力でもない。特定の社会において、錯綜した戦略的状况に与えられる名称」（Foucault [1976=1986:120-121]）と考えるのであり、フェミニズ

ムが問題にしてきた家父長制（性支配）という権力関係をもこうした観点から捉えることができる（これを「家父長制の唯名論」と呼んでおく）。とはいえ、これは家父長制という権力関係が幻想であるとか存在しないと主張しているのではない。性支配の制度（＝家父長制）を歴史貫通的・普遍的・実体的に存在する抑圧的権力関係と想定しないことの宣言なのだ。監獄に、学校に、工場に、家庭に、固有の合理性を備えた様々な権力装置があり、それらのマイクロな権力関係がマクロな制度（国家や資本制）を支えている。そして、それらの権力装置の下で各主体はしばしば矛盾した位置を経験する⁽¹⁰⁾。女性にとっても一部の男性にとっても、ボルノはこうした現象の一例だろう。

「家父長制の唯名論」をフェミニズムの文脈に置くとすれば、女性が歴史的に常に被支配者、被抑圧者、被差別者であったとする「抑圧史観」や、多様な女性の経験を抑圧する画一的な権力関係を前提とする女性学⁽¹¹⁾、没歴史的な本質主義に陥るラディカル・フェミニズムを相対化する視点を導入するだろう。たとえばJ・サウィッキによれば、ボルノを家父長制のイデオロギーと批判してきたフェミニズムは、リベラルであれラディカルであれ、抑圧的な権力関係を一元的に想定する本質主義的・決定論的な陥穽に陥っている（Sawicki [1991:29-30]）。

第二に、フーコーが想定する「権力」は、社会的な「知」の構成と密接に結びついている（power/knowledge）。第一の権力観念が歴史的な唯名論に基づくものとすれば、第二の権力観念は「いま・ここ」における権力の発動に焦点を合わせたものである。J・W・スコットが「ジェンダーとは、性差に関する知である」と概念化したように（Scott[1988=1992:16]）、また第2節の議論でも明らかなように、ジェンダ

ー・セクシュアリティは常に、科学的・宗教的・日常的（その他諸々の）真理として構成される「知」であるほかない⁽¹²⁾。フーコーのこうした概念枠組みは、理論家がみいだした客観的実在に応じて個々の言説の真偽を判別する「イデオロギー分析」から、真とか偽とかを判断することが可能になるような場の構成を記述する「ディスコース分析」への転回を示している（問題意識1の継承）。この時、ボルノというディスコースもまた、ジェンダーやセクシュアリティに関する「知」の一部であり、真理を生み出すディスコースである。この言説編成体において何が語られるのか（あるいは何が語られないのか）を分析する必要がある。

第三に、後期フーコーはディスコースのみならず、社会の諸領域で非言説的实践を通して作用する権力を想定している。この場合、権力の効果は抑圧的なものではなくむしろ主体性やアイデンティティを構成する生産的なものと考えられる。「日々の生活に浸透し、個人をカテゴライズし、彼の個人性に印をつけ、彼に彼のアイデンティティを貼りつける」作用のことを「主体化させる権力」と呼ぼう（Foucault[1982]）。このとき「男性/女性＝支配者/被支配者」という図式を始めから実体視するのではなく、「私」という個体が「女性（男性）」という自己同一性のレッテルを引き受けることそのものを主体化させる権力の効果とみることになる⁽¹³⁾。主体化させる権力は、自己同一性の再認とともに、その同一性を引き受ける「私」の構成にも関わっている。フーコーが提示した「セクシュアリティの装置 le dispositif de sexualité」⁽¹⁴⁾は、個人性の中核に組み込まれるべきコンポネントとしてのセクシュアリティと、自己同一性に貼られるレベル——とりわけ「男性/女性」というジェンダーの意味的秩序——を同時に産出し

ていく言説と実践の総体と理解しておこう（問題意識2の継承）。この観点からみると、ポルノはさしあたり諸個人を性的主体として産出する権力装置とすることができる。とはいえここで産みだされる「主体」はフェミニズムがいう「男はみる主体／女はみられる客体」における主体、あるいは「性的欲望の主体」とは微妙に異なっている。むしろセクシュアリティを自己の個人性の真理として追求するような主体といえよう。

フーコーの視点の受容はフェミニズムにとって画期的だったけれども、同時に種々の批判もなされている⁽¹⁵⁾。とりわけ「フーコーはgender blindである」とする批判は検討に値する。たとえばV・シードラーは、フーコーの方法では男性と女性がセクシュアリティに対してとる異質な関係⁽¹⁶⁾を殆ど把握することができないという（Seidler[1987:104]）。つまりフーコーは、諸個人をセクシュアリティの主体にする権力装置については論じるものの、そこで男女の間に非対称的な主体化が生じるというジェンダーの問題を十分に論じていない、と。この批判は概ね当たっていると思う。ポルノについていえば、それが与えるセクシュアリティのありようそのものに、質量ともに男女差があることは疑いえない。しかし「セクシュアリティ（性的欲望）もジェンダー（性的差異）によって決定されている」という言明は貴重な事実発見ではあるけれども、それだけでは不十分だ。なぜならジェンダーの非対称性がなぜ生じるのかという疑問を最終的に残してしまうからだ。むしろセクシュアリティの、ある独特な形成の仕方が同時にジェンダーの非対称を生み出すようなメカニズムを問題にするところに、フーコー主義フェミニズムが可能になる間隙が存在するとはいえないだろうか。分かりやすくいえば、フーコー主

義フェミニズムは「私が女（男）であること」（ジェンダーの問題系）と「私がある性的欲望をもった（もたない）私であること」（セクシュアリティの問題系）を同時に問題化するための方法である。フェミニズムが問題としてきたジェンダーの非対称性、男の性的欲望の差別性などの問題は、歴史的な言説編製の産物として、私が私を物語化する一つのあり方として、つまりセクシュアリティ形成の「意図せざる結果」として記述できるのではなかろうか。この観点からみると、ポルノは諸個人を性的主体として産出するセクシュアリティの権力でありながら、その一方で男性性／女性性を排他的に分離しつつ諸個人に男性（女性）としてのアイデンティティを貼付するジェンダーの権力ともいえる。ポルノが女性にとって差別的なものとして現れるとすれば、この性差の固定的構成の水準においてである。

4. セクシュアリティの装置としてのポルノ

さてこうしたフーコー主義フェミニズムの問題構制によってポルノという現象の分析を始めよう。しかし議論の前提となることを述べるのがどうしても必要である。まずフーコーのいう「主体化 assujettissement」について。フーコーが発見した「主体」は「男はみる主体、女はみられる客体」のように、主体化と客体化が二者択一的に成立する場合の主体ではない。むしろある知の客体であることによるのみ主体であることが認証されるような主体＝隷属体である。思うに一部のフェミニズムがいう「みる主体」や「みられる客体」という現象そのものが可能になるためにはより根源的な「主体化」——徹底的にみられる存在であることの帰結と

しての「内面」の具備——が必要だ。セクシュアリティの装置のコンテキストに則していえば、自己に帰属するセクシュアリティの「知への意志」を持ちながらあえなく挫折する個人こそ性的主体 sexualized subject と呼ばれるべきであり、この主体は自己の真理⁽⁷⁾を求めれば求めるほど権力の与える真理に従属するというパラドックスを生きる。有体にいえば、セクシュアリティの装置とは本当の自分を・性的欲望によって・強制的に知らしめる装置のことであり、そこでは「主体性—アイデンティティ—セクシュアリティ」が三位一体の仕掛けとして作動する。

ところで、ポルノを享受する（みる・読む・聞く）という行為を可能にする物質的条件は、各個人がひとりだけでみるための特殊な空間、つまり個室＝自慰空間が確保されていることだろう⁽⁸⁾。こうした意味でポルノを享受する行為自体が近代家族的・都市的な私的空間編成の産物といえる⁽⁹⁾。そしてこの空間においては女性の裸体を眺め、他者の性行為に興奮し、そこから秘密の快楽をひきだすという一連の営みはすべて「覗き見」として成立している。つまりポルノを享受することは個別化された空間における覗き見主義であり、ポルノの受け手とは覗き見する主体に他ならない。そしてこうした様式でポルノを受容する覗き見する主体の圧倒的多数が男性であることは認めざるをえない⁽¹⁰⁾。だがここでは「男性だからポルノをみる」のではなく「こうした様式でポルノをみるからこそ男性であることが要請される」という因果関係をあえて想定したい。その上でポルノというディスプレイのもつ特性——女性の告白スタイルの多用、性的欲望・行動の描写の多様性、女性身体描写への特化——がいかにして受け手となる諸個人を（男性としての性的主体として産出

するかを記述する。そうしてポルノがセクシュアリティの装置の一構成要素として固有に要請する「真理」産出のメカニズム——セクシュアリティの真理をジェンダーの真理として与えてしまうようなメカニズム——を明るみに出そう。本稿で扱うポルノの素材（アダルトビデオ、ポルノ小説、ポルノコミック）はごく限られたものであり、ポルノの「いまとここ」を表現する必要最小限のものでしかないにしても、ポルノの「いま・ここ」を素描することによって過去を系譜学的に遡及する今後の作業——ポルノの歴史社会学——に繋げていきたいと思う。

5. ポルノというテクノロジー

(1) 自慰空間に萌芽する性的欲望への欲望
ところでポルノを享受する自慰空間において受け手である男性が充足している欲望とはどんなものだろうか。このことを考えるとき、あるポルノ写真家の次の発言は示唆に富む。

いま男の雑誌を買う連中は、この女はマスをかきたくなる女だというんで買うんだらね。モデルが可愛いとかきれいとかいうより、どれだけマスをかく気を起こさせるかが問題なんだ（立花[1984:41]）

ここには一介のポルノ写真家の苦心談を越えた鋭い直観がある。つまりポルノの受け手が充たしているのはたんなる性的欲望ではなくむしろ「マスをかく」という性的欲望そのものを求める欲望なのだ。金塚貞文が示唆するように、ポルノを享受することで充たされる欲望とは「性的欲望（快楽・興奮）を刺激したい、喚起したい、かきたてたいという欲望」に他ならない（金塚[1987:39]）。これは本能的な欲望とい

うより「性的欲望への欲望」であり、フーコーが近代西洋社会に見いだした「(自己の性的) 快楽の真理を知り、それを明るみにだし、発見する快楽、それを見ることによって自らを幻惑する快楽」(Foucault[ibid,93])というセクシュアリティのありようと関連しているに違いない。重要なことはこの「性的欲望への欲望」が、自己のセクシュアリティの同一性に関わる真理=知と結びついていることだ。この空間では「自分がどのような性的嗜好や欲望をもった人間なのか」という問いが不断に反復される。ここで受け手は自己を「他ならぬ私」、唯一な存在として認知し、ポルノを享受する行為そのものを、自己に帰属するセクシュアリティの真理を知るための契機とする。性的欲望への欲望が自己同一性の核としてインプットされること、ここに私たちが今日理解する「セクシュアリティ」という概念の根幹がある。その意味でポルノとそれを可能にする空間はまず第一に、諸個人を自己のセクシュアリティの真理に駆動する主体として産出している。

(2) 性的欲望の「多様性」

とはいえ更にポルノの特性に則して内在的に記述を進めなければならない。ポルノを少々見聞きしたことがある人ならすぐに気づくことだが、内容の単調さに比してそれが提供する性的行為・性的欲望のバリエーションの不自然なまでの「多様性」には驚くべきものがある。思いつくままに挙げてみても、オナニーやフェラチオはいうに及ばず、3P、SM、スカトロ、レズビアンなど行為として「倒錯」したものや、レイプ、近親相姦、獣姦、各種コスチュームプレイ(概して看護婦、女子高生、女教師、秘書)など性行為のコンテクストとして「倒錯」しているものがある。それらすべての行為が常に男

性の性的興奮を導き、性的欲望を射精において充足するかのように描くという唯一の条件のもとで、性的行為・性的欲望の「多様性」は容認される。

これら性的欲望の形式の多様性は、ポルノの受け手に対してどのような効果を与えるのか。たしかにポルノにおける性行為の多様性は男性の欲望の回路を水路づける働きをもつはずだが、とはいえそれは現実における男女の性愛の多様性をまったく保証してはいない。むしろそれは常に性的欲望=興奮=射精という男性の性のステレオタイプに則しつつ、男性の性的欲望を想像的に充足すると考えた方がよいだろう。つまりポルノの提出する性的欲望は、つねに性的に興奮しなければいけないという単調さ(同一性)に支えられてはじめて成立可能な多様性(差異性)なのである。とすると、想像的に可能な多様なセックスの選択肢のなかで、受け手は自分がどのようなセックスを好み、なにに性的興奮を感じるのかを否応なく知らされることになる。つまり、諸個人は他ならぬ自己のセクシュアリティの真理を性的興奮を賭金として再認する。ポルノはそのような営みを可能にするための性的欲望の語彙を提供しているのだ。

(3) 女性によるセックスの真理の告白

ポルノのメッセージは単なる女性の裸体や性行為の描写ではない。というのもポルノのメッセージの伝達法には、ある一定の形式性が存在するからだ。それをさしあたり「告白のスタイル」と呼んでおきたい。たとえば、あるポルノ小説。

私、不倫をしております。・・・主任の裸の体に抱きしめられ、舌と指でみっちり愛撫を受け、そして、ついには、その逞しいモ

ノで突き上げられた、その時。私は、わかったのです。今まで自分が知っているSEXなどは、快樂でもなんでもなかったと。

(「女のスケベ告白」「告白チャンネル」1990年9月号)

このようにポルノ小説では女性が自己の性体験を告白するという体裁をとるものが不自然なまでに大量に存在する。こうした女性の体験談・告白もののジャンルは宇能鴻一郎の開発によるという俗説があるが、実際には近代ポルノの古典とみなされる「ファニー・ヒル」や「ジュスティヌ」以来、ポルノ小説は告白のスタイルを保ち続けてきている。同様の手法は昨今のアダルト・ビデオにおいても、AV女優のキャラクター紹介の形式をとりつつ頻繁にみられる。身体のプロフィール、AV界入りの経緯を皮切りに、「初体験はいつ・いかにしてか?」「いままで何人と性交渉をもったことがあるか?」「今までのセックスで一番かんじたのはどういうものか?」「オナニーはどういう風にするか?」「どうされたら・どこの部位が一番感じるか?」「好きな体位はどれか?」等々の質問が、セックスシーンの導入部分として多用される。告白のスタイルはポルノのいわば文法として成立しており、告白の主体である女性はどんな状況における・どんな体位で・どんな性行為が自分にとっての最良のセックスであるかを読者に報告するという形式のもとで、受け手を性的に興奮させる効果を発揮している。性的な興奮や欲望の真理はひとまず「女性」に固有の真理を語る声として「男性」に呼びかける。これは「女性がポルノ(エロチカ)の受け手として性的欲望の主体となる」というフェミニズムのスローガンとはむしろ逆行する現象である。「女性はかくあるのだ」という知を獲得す

ることが性的興奮へと通じているという、この装置回路に載るためには、いまやポルノの受け手である個人は「男性」でなければならないからだ。現存のポルノは主体化する個人が「男性」であることを不断に要求している(女性のポルノといわれるレディース・コミックや「や・お・い」マンガについては、別の分析が必要だ)。

(4) 女性性への誘いとその挫折

さらにピンナップ、ヌード写真にはじまり漫画、ピンク映画、アダルトビデオにいたる種々の形態の視覚的ポルノに一貫してみられる特徴は、女性の身体・裸体・性器をセックスに結びつけたイメージとして描写することである。ポルノの描写は単なる性行為の記述ではなく、女性の身体を、女性に固有のセクシュアリティを描写することにあくまで力点があるのだ。とりわけ近年のアダルトビデオやポルノコミックの性描写においては、男女が性行為を行っているというコンテキストの一貫性を放棄してまで、男性の身体を不可視化して女性の身体の描写を優先する技法が発達してきている。図1では、後背位において描かれるべき男性の身体が透明人間化しており、図2では騎乗位で寝そべている男性身体は構図の中からはみ出している。

とはいえこの事態を「女性身体の客体化」の進展として説明するのはいささか早計である。というのもこうした女性身体の描写は、女性のセクシュアリティのなんたるかを男性に問いかけることによって、虚偽的な知識をイデオロギー効果として植えつけるよりはむしろ、受け手に対して女性のセクシュアリティの真理に対する不断の懐疑を生じさせてしまうからだ。なかでも特にアダルトビデオの愛好者は、演じている女優が本当に「本番」をしているのか、エク

スタシーを感じているのかといったことに神経症的なまでの興味を示す。アダルトビデオの情報誌では、しばしばこうした「疑問」への回答企画がなされる。

素朴な疑問・・・女優の使っているパイプって本当に気持ちイイのですか？・・・諸君、人を騙すのはやめろ！本番と疑似の見分け方は？・・・カラミの時って、台本があるのですか？・・・ビデオの中の喘ぎ声って本当なんだろうか？

(「ビデオボーイ」1992年11月号)

一般にポルノでは、女性のセクシュアリティは「謎」として提示される。そして重要なことは、この「謎」を解くための手だてがポルノの世界内部には決して存在しないということだ。アダルトビデオにおいて、男性のオルガズムが射精という視覚的な表現をとるのに対して女性がオルガズムに達したかどうかを確認する術は原理的に存在しない。とすればポルノの仕掛けは、受け手に「女性の真理はどんなものか」と問いかけつつ、決してその解答を十分な形で示すことができない点に存するのだ。そういうわけで女性のセクシュアリティの真理をかいま見たいという受け手の切ない願いは、常にすでに挫折を強いられることになる。受け手は決して女性の視点をとることができず、女性に同一化することは不可能であるがゆえに、自己を、女性には同一化不能な他者、すなわち男性として再認するのだ。受け手はいまや自己同一性の指標として男性性を選択・再認せざるをえない。ポルノのなかでペニスの勃起や射精、女性を「イカせる」ことに異様なまでの関心と価値が配置されること、さらにポルノが「男の・男による・男のためのメディア」であることはこうした事情に由来する。つまりポルノは受け手を、

自己のセクシュアリティの真理に拘束された主体として産出する権力装置であると同時に、性的差異の再認を強化・補強し彼を男性として作り上げるジェンダーの権力装置でもある。「ポルノに描かれるレイプシーンやミソジニーは女性差別である」というフェミニズムのリアリティはようやくここに位置付く。つまり、よしあしは抜きにしてポルノの受け手である男性たちの一部は、自己の男性性を一貫した物語として自己に提示するために、レイプやミソジニーという物語を必要としているといえよう（もちろん受け手が自己の男性性を保持するための物語が、これだけに留まらないことはいうまでもない）。

6. 結論

以上みてきたように、ポルノというディスコースが受け手に与える効果はたんなるイデオロギー効果ではない。むしろそれは受け手が自己同一性の中核としての性的欲望（つまりセクシュアリティ）を再認するための選択の地平（性的欲望の語彙）を構成している。この選択の地平において、諸個人は自由な自己同一性の再認を強制される。言い換えれば、性的同一性の自由を強制する権力である。そしてこのゲームに参入するかぎり、諸個人は女性性の挫折の結果として自己を男性として再認する。諸個人はまず、自己のセクシュアリティの真理を追い求める主体として産出され、ついでポルノグラフィックな男性性を自己の真理として引き受ける。ここで「私」に帰属する真理の唯一性は男性の真理という「多様な」画一性へと変換される。

「家父長制とはなにか、いかに作動するか」という問題構制とそれへの解答がいまフェミニ

ズム社会理論にいま問われていると思う。それに対応させる形でいうならば、ポルノに典型されるようにすくなくとも近代の家父長制は、男／女を問わず諸個人をセクシュアリティの真理へと駆動する主体として産出する一方で、各個人を男あるいは女として性別化しその性的差異を強化するように働く作用をもっている。そのような性的差異を真理として与えられた諸個人の実践の効果として性差別がある。ポルノは、フーコーが18～19世紀の西洋社会から発掘したセクシュアリティの装置（告白の制度と性科学の接合形態）の現代的変容物であり、非西洋社会におけるセクシュアリティの装置の機能的等価物とさえいえるだろう。ポルノ批判における「男はみる主体、女はみられる客体」という比喩が様々な矛盾を抱えつつも依然として有効であるとすれば、それはポルノが受け手を男性として性別化するがゆえに、男性を独占的にこの「みられることなくみる」構造的な位置に立たしめるからである。つまりそれはフーコー主義フェミニズムが依拠する用語でいえば、家父長制下のセクシュアリティの装置なのである。むしろポルノにおける主体化のメカニズム、これが家父長制の装置全体といえるわけではない。とはいえ本稿で明らかにしたような「個人性としてのセクシュアリティ」という契機を理論構制から外してしまったようなフェミニズム社会理論はすべからず陥穽にはまるだろう。私としてはこのことを踏まえつつ、さらなる家父長制の歴史的全体像の解明を自らの社会学的課題と任じたい。

註

(注1) 「男のセクシュアリティがペニスという性器に裏付けられた本質的に暴力的なものである」とする主張の典型はアンドレア・ドウォーキンに典型的である (Dworkin[1981])。またリン・シーガルは、八〇年代のフェミニズムが「男の暴力とその超時間的・普遍的な必然性」を問題にしはじめ、ラディカル・フェミニズム内では「男は決して変わらず、男性優位は不可避で矯正不可能とする信念」が優勢であるという (Segal[1987=1989:26])。

(注2) ジェンダーとセクシュアリティという概念について一言。これらの概念は通常、性科学・フェミニズム・社会学ではセックス／ジェンダー／セクシュアリティと並び称される分析概念である。ジェンダーは「社会的・文化的・獲得的性差」、セクシュアリティは「性的嗜好・性的欲望」と考えられているが、少なくとも分析的な概念として両者は直交する位置・独立した関係にある。つまりジェンダーにおいては文化的に構成される男性と女性の心理的・統計的「差異」が言及されているのに対して、セクシュアリティという概念では性行為や愛情（性愛！）に結びついた種々の「欲望」のありようが問題になる。私はこうした概念設定を踏まえつつ、しかしフーコーの「セクシュアリティの装置」と導かれて、ジェンダー／セクシュアリティを社会的・歴史的現象の記述概念として導入することにしたい。とりわけ「セクシュアリティ」という概念には文化的・歴史的構成物という形式的含意以上に、近代社会においては自己の個人性、自己同一性と深く関わっているという内容的含意がある。なおこの意味ではフーコーが使った「セクシュアリティ」という表記を採用するほうが正確だが、便宜上本稿では「セクシュアリティ

ィ」で統一してある。

(注3) たとえば次のような言説を典型とする。

「ポルノグラフィーの表現する女と男の不均衡な力関係、女性の劣った性としての描かれ方が、ポルノグラフィーの受け手にそうした女性観を植え付け、男性を性差別的主体へと構成していくというのが、私のポルノグラフィー論の核心である」(船橋[1992:277])。

(注4) 商品社会、産業社会、管理社会に基づく男性疎外論としては金井淑子が典型的である。「七十年代はじめのオイル・ショック以降、もはや十分に貨幣物神の体現者ともたたりえなくなり、その地位の相対的低落をみせてしまっているにもかかわらず、男の身体性は企業から自立しえず、女性の側の自立志向の中で、抱きとめられる母という支柱を失ってますますその抑圧感を強めている。そうした男の身体にとってもっとも都合のよいのがまた、ポルノグラフィー化された性情報の消費というメディア・セックス状況ではないか。」(金井[1991:49])。

また、男性によるポルノ論としては小浜逸郎が典型的である。「ポルノは男が男であること(つまりその裏が女が女であること)の一つの現れなのである。」……「自分にとっての〈性〉の問題を〈生活〉へ個別化・時間化できにくい男性にとって、ポルノへの志向はその挫折の積み上げの果てに過激化してしまった模擬表現以外の何ものでもない」(小浜[1990:52-57])。

注3のようなフェミニズムの言説と小浜型の言説は鋭く対立する。船橋は「男性支配社会が男性を差別的主体として構成する」という構造決定論の立場にたち、小浜は「男性は生理的・実存的にポルノが必要だ」とする現象学的構えをとる。これを「構造か主体か」をめぐる社会学的論争とみ

ることができるが、いずれの立場もポルノの社会学的説明には失敗している(詳しくは赤川[1991]参照)。

(注5) さらに女性内部の問題としても、ラディカル・フェミニズムが「ポルノは男の・男による・男のための抑圧装置」と過度に強調するあまり、現実にポルノを享受する女性たちを「男性支配イデオロギーを内面化した裏切り者」と想定するほかになく、フェミニズムの言説がポルノを享受する女性たちにとって「反権力的な権力」として抑圧的に機能する可能性もある。白藤[1992]は現実にポルノを享受する女性たちの声を収録しているが、ここではポルノに対する個々の女性の反応がいかに多様であるかが露になっており、問題の複雑さを示している。

(注6) フーコーによれば、実定性positivitéとは「それについて真なる命題や虚偽の命題を肯定したり否定したりすることのできる対象領域」と定義される(Foucault[1971=1981:71])。

(注7) 現在の反ポルノの論理に従いつつ、この分節線を過度に強調するならば、性にまつわる表現はすべて差別的だという極端な主張か、もしくは「ポルノ／エロチカ」を分類するという、ある意味で不毛な作業に陥るほかない。前者はともかく後者は「〇〇は猥褻かいなか」と問うことと変わらない。いうまでもなくある表現が「猥褻(ポルノ、性差別)であるかいなか」は、それを読む人の視点と、猥褻であるなしを決定する日々の実践的活動にかかっている。その意味でも「普遍的な」基準はありえない。むしろセクシュアリティの領域における主体形成、たとえば個人が自分を男性として提示する物語形成の一貫としてポルノを利用することから性差別現象が副次的に生じると考え

たほうが論理関係の設定としてベターであろう。

(注8) ゆえにポルノについて問うことは、近代社会におけるセクシュアリティ現象を問うための不可欠の準備作業となるはずだ。セクシュアリティは万古普遍の現象ではなく、近代においてポルノ、性科学、性教育、マスメディア、さらに近代家族における性役割の編制などと密接に絡み合っている。こうした視点から「家族・ジェンダー・セクシュアリティの近代」を問う歴史社会学が私の一連の作業を通底する課題である。

(注9) 近年、文学批評や歴史学の分野においてミシェル・フーコーの——とりわけ1975年『監獄の誕生（監視と処罰）』におけるパノプチコン分析、1976年『性の歴史Ⅰ 知への意志』におけるセクシュアリティの装置論を経て1982年『主体と権力』に至るまでの、「権力分析」としてのフーコー——の発想を利用しつつフェミニズムの理論的革新を行おうとしている動きが一つのトレンドを形成しつつある。フェミニズムの諸潮流とフーコーの関係を問うたものとして、Diamond & Quinby[1988]、Sawicki[1991]、McNay[1992]。マルクス主義フェミニズムとの関係を問うたものとしてBarrett[1992]がある。歴史学（女性史）ではScott[1988=1992]、社会学ではGiddens[1992]がフーコーの批判的読解を媒介として独自の理論的・実証的展開を示している。

(注10) たとえばジャック・ドンズロによる一八世紀の女性の分析には、女性が家庭のなかで単に抑圧される者に留まらなかった事実が書き込まれている。ポルノについても「ポルノの受け手としての女性」という観念はポルノ批判の言説にとっては一種のアポリアになる。なぜなら、こうした視点をとれば「ポルノによって抑圧されているはずの

女性が当のポルノを享受している」という矛盾した（ようにみえる）現実と直面するからだ。だが、こうした女性たちを「男性支配イデオロギーを内面化しているのだ」と分析したり批判したりするのは単なる理論の怠慢にすぎない。

(注11) たとえばドロシー・スミスにとって、「女性の観点から出発するということは、女性の間に一つの共通した視点が存在することを意味しない。共通しているのは、私たちを排除することに成功した社会関係の組織化のあり方である。」(Smith [1979=1987:228])。これに従えば女性学的前提は、女性の経験を抑圧する権力関係の一義性、つまり女性の抑圧された経験の共通性である。これに対し、フーコー主義フェミニズムは「女性の経験の多様性を抑圧したり開発したりする権力関係の多義性」を問題化することになろう。さてスミスがいうように、自身の抑圧された経験を言葉にし、理論化していく、女性学の方法（コンシャスネス・レイジングと呼ばれる）の意義は最大限に認めるべきである。ただしこうした理論化のなかで言語化される経験が、誰のものか、何に帰属されるべきかについては細心の注意が必要である。たとえばもっとも素朴なポルノ批判では「私は女としてポルノを不快に感じる」という表明がされる。「私が不快に感じる」と、これはたしかに経験としてある。だが「女として不快に感じる」とは何を意味するのか。こうした言明はしばしば「女はみんなポルノを不快に感じる」という語られざる前提をもつ。そしてこの言明が理論的真理として宣告されるとき、同じポルノに対して異なる「経験」をした女性たちの声はしばしば黙殺される。

(注12) フーコー主義フェミニズムの視点を、エスノメソドロジー的なフェミニズムと接続させることが可能だろう。この意味で江原由美子の論文「フ

フェミニズムと権力作用」は、こうした「いま・ここ」に働く家父長制の権力作用を「問い」の立て方の問題——女性の社会的処遇を性差の議論と関連付け、しかもそれを女性自身に選択させるように装うこの「問い」の立て方（江原[1988:18]）——として指摘している点で重要な論文である。江原がここで「問いの立て方」と呼ぶものこそ、フーコー主義フェミニズムの用語系でいえば「言説編制」あるいは「知」と呼ばれるものである。

(注13) 「自己同一性 self identity」という概念を西洋的なバイアスのかかった概念として理解してはいけない。むしろ社会的に産出される「お前は何者か」という問いに対して与えられる答え、そこで使われるレッテルの同一性のことと理解されねばならない。「お前は何者なのか」「私はフェティシストである」といったような問いかけ—解答に使われる「フェティシスト」、これが自己同一性（のひとつ）である。

(注14) 慎重な読者なら「君は、あるいはフーコーはセクシュアリティ（性）をどう定義するんだい？」と尋ねるだろう。しかし私の考えでは、セクシュアリティを定義しようとする営みそのものがセクシュアリティ現象のうちにある。「セクシュアリティ（性）とは何か」という問いこそ近代社会が産出しつづけたものなのだから。むしろ「セクシュアリティ（性）」というキー概念については「人々がセクシュアリティ（性）と想定するもの」という位の構築主義的な同語反復定義を採用した上で、歴史的・社会的に「セクシュアリティ」という観念がどのような意味付与を受け、人々の言説実践としてどのように使用されていたのかを問うていくほうが、社会学として有益な仕事になると私は考えている。

(注15) フーコーに対するフェミニズムの側からの批判点をよく整理したものとして、McNay [1992: ch 1] 参照。本稿と直接の関連はないが、フーコー理論の政治的効果を問題にした批判について言及しておく。つまり「フーコーの主体性批判はフェミニズムが提起する女性の自立性や主体性という概念に抵触する」というものである。たとえばジャナ・サウィッキは「フーコーがアイデンティティ形成の危険性を強調すると、それは女性の闘争を否認する基礎づけになってしまい、家父長制的利害関心によって限定されないアイデンティティ感覚を獲得することができなくなる」という（Sawicki [1991:104]）。もはや「主体性」をあらゆる理論装置、あらゆる批判の実体的根拠として素朴に前提することはできないことをフーコーから学ぼう。とはいえ同時に「全ての主体化が権力の効果である」と過度に一般化する必要もない。フーコーもいうように「権力関係があるからには抵抗の可能性がある」のだ。つまり主体化に対する抵抗は主体化の装置に内属しつつ、絶えざる闘争を繰り返すことによってでしか可能ではない。となればむしろ主体性をフィクショナルな賭金として認めつつ「いかにして、いかなる条件のもとで権力関係（主体化）に対する抵抗が可能なのか」を問うことの方が重要だろう。

(注16) 「男女がセクシュアリティに対してとる異質な関係」の一例は、例えばセクシュアリティと生殖 reproductionの意味的連関である。特に女性にとってセクシュアリティは常に生殖を保留点として「産む性」というジェンダーの問題へと繋がっていく。その意味で富岡多恵子の小説の一節はじつに示唆的である。

でもね、ピルって革命よ、やっぱり。ピルのん
でると、女だって男と同じよ。アタマでセック
スできるのよ。えらそうない方すればね、セ

ックスを抽象的に楽しめるのよ。結局、快樂って想像力でしょ。セックスが子供を産むことと結びついていたら、抽象的になんて絶対にならないわよ。(富岡[1985:101-102])

ビルという薬の副作用が女性の身体だけに課される非対称性を看過すべきではないにしても、この「セックスを抽象的に楽しめる」というリアリティは男性が歴史的に確保しつづけたものであり、こうした感覚へ女性が開かれていくのは20世紀に入ってからである。

(注17) 「自己の真理」という言い方について、「原理的に考察すれば、自己の真理という言い方は語義矛盾だ。」と引っ掛かった読者もいよう。なぜなら「真」とか「偽」が判別可能であるためには、それが自分以外の他者によっても承認され、その認識が共有されねばならない。この意味で、自己に固有の真理とか、誰も知らない「本当の自分」などは存在しえないからだ(ヴァイトゲンシュタインの「私的言語」が不可能であるように)。しかしここで強調したいのは、その真理が「他者に共有される／されない」ということではなく、「それが自己に帰属する／しない」という分割線である。ある社会的条件のもとでは、「自分に(帰属する)固有の真理が存在する」、「本当の私」という信憑が成立する。本稿でいいたいことは、「誰も知らない私の真理が存在する」ということではなく「自己に帰属する真理が存在するという信憑がポルノ受容のなかで生じてしまう」ということだ。むしろこのような信憑に導かれつつ、決してそれに対する満足な解答を与えないところにポルノの仕掛けがある、と考えるのである。

(注18) しかるに大勢の人間が一つの場所に集って表象を鑑賞するような空間——居間のテレビや映

画館——でのポルノ受容(鑑賞)は、現在の典型的なポルノ受容の様式(ひとりでティッシュを用意しながらみる)とは異なった別の分析方法——ドラマツルギーの手法——を必要とするだろう。これは「メディアの受け手論」の視点からいっても興味深い分析になるはずである。つまりこの立場は、テキストの内容そのものよりもそれをどのような状態で受容したのかに関心を払っており、テキスト受容の場での複数の人々による言葉の解釈、笑い、反応などの社会的相互作用がテキストへの解釈・評価を決定付ける要因と考えるからである。こうした視角からみれば現代のポルノ受容の特徴は、まさに受容場面・解釈場面における社会的相互作用が欠如していることにあるともいえよう。

(注19) この事情の現代的な現れをよく伝えるものとして、永井[1992]。

(注20) ポルノ(とりわけアダルト・ビデオ)の視聴・受容頻度に関して、現時点ではやはり男性と女性間に落差が存在する。たとえば東京都生活文化局「ビデオソフトの青少年に与える影響に関する調査」では、アダルト・ポルノを大学生男女が「よく見ている」「時々見る」「見たことがある」という三つの割合を合計したものは、男性81.4%(順に9.2, 22.2, 50.2)に対し女性19.9%(1.2, 0.6, 18.1)であった。明らかに男性の方が大量、頻繁にアダルトビデオを視聴している。また興味深いのは男性の方がビデオを一人で見るとの傾向が強いことである(大学生男性42.5%、大学生女性16.8%)。逆に女性はビデオを家族と一緒にみる傾向がある(生活文化局[1992])。

図1 第25歩兵師団

『ABCはいけない授業!』108頁、
フランス書院コミック文庫。

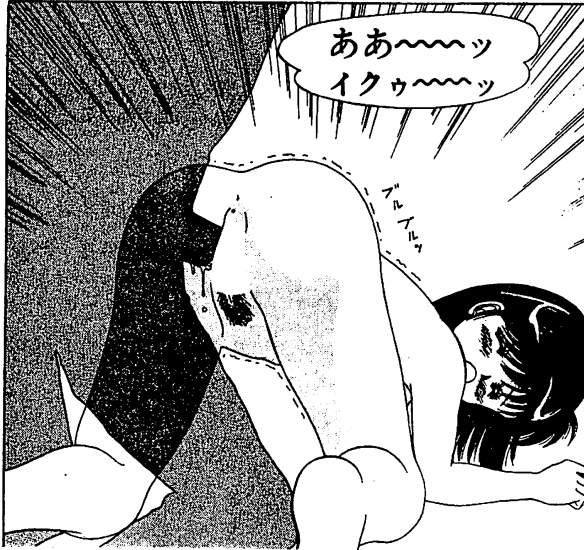


図2 森山 塔

『真夜中のクロール』24頁、
フランス書院コミック文庫。



引用文献

赤川 学 1991 『性』の装置としてのポルノグラフィー：性』の比較社会学・序説』、東京大学社会学研究科修士論文。

————— 1992 「ポルノ批判：その社会運動としてのアイデンティティと社会理論としての背後仮説」、『女性学年報』13号、25-35、日本女性学研究会。

Barrett, Michèle 1991 *Politics of Truth: From Marx to Foucault*, Polity.

Barry, Kathleen 1979 *Female Sexual Slavery*, Prentice-Hall. =1984 田中和子訳、『性の植民地』、時事通信社。

Baudrillard, Jean 1977 *Oublier Foucault*, Galilee. =1984 塚原史訳、『誘惑論序説』、国文社。

Diamond, Irene & Quinby, Lee (eds.) 1988 *Feminism & Foucault: Reflections on Resistance*, Northeastern Univ Press.

Dworkin, Andrea 1981 *Pornography: Men Possessing Women*, E.P.Dutton.

江原 由美子 1988 『フェミニズムと権力作用』、剋草書房。

Foucault, Michel 1971 *L'ordre du discours*, Gallimard. = 中村雄二郎訳、『言語表現の秩序』、河出書房新社。

————— 1976 *Histoire de la Sexualité Vol.1 : La Volonté du Savoir*, Gallimard. =1986 渡辺守章訳、『性の歴史 I 知への意志』、新潮社。

————— 1982 "The Subject and Power", in Dreyfus, H. & Rabinow, P. (eds.) *Michel Foucault*, Univ of Chicago Press.

船橋 邦子 1992 「リベラリズムはフェミニズムの敵か?」、白藤編[1992:276-280]。

Giddens, Anthony 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love & Eroticism in Modern Societies*, Polity.

- Hyde, Harford, M. 1964 *A History of Pornography*, Heinemann. =1974 笹倉・島岡・金井訳、『ポルノグラフィの歴史』、新泉社。
- 金井 淑子 1991 「“自立の迷走” からのフェミニズムの自立のために」、小倉・大橋編、『働く／働かないフェミニズム』、p32-55、青弓社。
- 金塚 貞文 1987 『オナニズムの仕掛け』、青弓社。
- Kappeler, Susanne 1986 *The Pornography of Representation, Polity*.
- MacKinnon, Catharine 1987 *Feminism Unmodified: Discourse on Life and Law*, Harvard Univ Press.
- McNay, Lois 1992 *Foucault and Feminism*, Polity.
- 永井 良和 1992 「アダルトビデオと欲望の変容」、『ポップコミュニケーション全書』、PARCO出版。
- 小浜 逸郎 1990 『男はどこにいるのか』、草思社。
- Sawicki, Jana 1991 *Disciplining Foucault: Feminism, Power, and the Body*, Routledge.
- Scott, Joan, W. 1988 *Gender and the Politics of History*, Columbia Univ Press. =1992 荻野美穂訳、『ジェンダーと歴史学』、平凡社。
- Segal, Lynne 1987 *Is the Future Female?*, Virago. =1989 織田元子訳、『未来は女のものか』、劉草書房。
- Seidler, Victor, J. 1987 'Reason, Desire, and Male Sexuality', in Caplan, P. (ed.) *The Cultural Construction of Sexuality*, 82-111, Routledge.
- 白藤花夜子 (編) 1992 『ニュー・フェミニズム・レビュー3 ポルノグラフィー』、学陽書房。
- Smith, Dorothy, E. 1979 'A Sociology for Women', in Sherman, J.A. & Beck, E.T. (eds.) *The Prism of Sex*, 135-187, Wisconsin Univ Press. =1987 田中和子編訳、『性のプリズム：解放された知を求めて』、劉草書房。
- 1989 'Sociological Theory: Method of Writing Patriarchy', in Wallace, R, A.(ed) *Feminism and Sociological Theory*, 34-64, Sage.
- 立花 隆 1984 『アメリカ性革命報告』、文春文庫。
- 東京都生活文化局 1991 『ビデオソフトの青少年に与える影響に関する調査』。
- 富岡 多恵子 1985 『砂時計のように』、中公文庫。

(あかがわ まなぶ)